親からのテレビアニメ視聴番組制限が世代間で伝達するか

三宅正太郎　　藤田　文

本研究の目的は、テレビアニメ番組の視聴を制限することが世代を超えて伝わるかを明らかにすることである。現代のアニメ番組に対する評価とまた自分が大人になったとき自分の子どもに視聴制限をするか、彼らは子ども時代に親からテレビアニメ視聴の制限を受けた影響が関係するかを、69 名の高校生と大学生 190 名を対象に調査を行った。主な結果は、自分の両親とテレビを見て厳格な制限を受けている生徒・学生は子ども向けテレビアニメの制限の必要があるとの意見であった。これらの結果は、規律が両親から子どもたちへ伝達したことがうけとれる。

【キーワード　テレビアニメーション番組視聴　視聴制限　世代間伝達　視聴指導　】

1. 問題と目的

テレビが一般普及し始めて、約半世紀が過ぎた。1970 年代初頭には、すでにテレビの国内世帯普及率は 9 割を突破し、生まれた時からテレビが部屋にある環境で育った世代が、さらに次の世代の子育てをしている状況である。このような親のもとで現代の子ども達は生後間もない頃からテレビを当たり前のように見ている。菅原ら(2008)の調査によると、1 週間の調査期間中の映像接触時間（週平均 1 日）はただついているだけのものも含めて、0 歳で 3 時間 35 分（215 分)、1 歳で 4 時間 2 分（242 分)、2 歳で 3 時間 30 分（210 分)、3 歳で 3 時間 8（188 分)、4 歳で 2 時間 48 分となっている。1 週間の調査期間中に少しでもテレビに接した乳児の割合（＝テレビ接触者率）は、0 歳で 97%、1 歳で 99%、2 歳で 97%、3 歳で 97%、4 歳で 96%である。また、テレビ視聴時間は、0 歳から 1 歳にかけて、1 時間 8 分から 1 時間 44 分に増えるが、2 歳になるとやや減って 1 時間 31 分、3 歳で 1 時間 36 分、4 歳で 1 時間 30 分と安定してきている。このように、乳児期からすでに多くテレビと接触しており、ついているだけの時間を含む接触時間は、加齢にともない減少するものの、幼児期にもテレビ視聴は引き続いて 1 時間以上行われている。

そこで問題となるのが、放送開始当初から言われているテレビが与える子どもへの影響である。子どもを持つ親はもちろん、社会の多くの人々が様々な悪影響を危惧している。テレビの視聴時間の長さによる子どもへの影響を調査した結果によると、長時間視聴児は朝が弱い（短時間視聴児よりも寝覚めたときに「とてもねむい」という、朝食があまり食べられないなど)、勉強が苦手な者が多いといった影響があることが示されている（深谷，1986)。一概にテレビ視聴だけが原因となっているとは言い切れないが、問題を肥大化させている可能性は十分考えられる。その反面、NHK の教育番組をはじめ、ドキュメンタリーなどが情操教育や教材として役立てられていることも事実である。テレビの影響を考えると、子どもを取り巻くテレビ環境を親がどのようにコントロ

ールしていくかが重要な課題となるといえるであろう。

親の視聴制限に関する従来の研究では、大部分の親はテレビ視聴に何らかの制限を加えようとしているようだが、それほど厳しいものではないと考えられる。総理府青少年対策本部（1982）の保護者に対する調査では、テレビ番組の制限はそれほど高率ではなく、「見る番組を決めている」のは20%、「視聴番組についてときどき注意する」が60%で、「自由に見せている」が17%だった。また、団塚・高橋（2002）では、小学5、6年生で、「テレビを特に制限なく自由に見ることができる」と回答したのは79%で、「時間を決められている」が10%、「見る番組を決められている」が5%であった。小学4〜6年生の両親を対象にしたNHKの調査では、視聴時刻、視聴時間（の長さ）、視聴番組の順に制限が厳しく、父親よりも母親の制限が強いことが認められた（NHK世論調査部，1985）。

さらに、テレビ視聴制限の効果を調べた研究（深谷，1983）では、「テレビはよくないので見ないほうがよい」というような批判的に指導を行ったグループ、テレビの見方を考えさせ、子ども自身に積極的に良い番組を選べるよう指導したグループ、生活時間と視聴した番組を毎日記録させることだけを行って、積極的には指導しなかったグループに分け、実験を行った。その結果、テレビ視聴において批判的(制限を与えた)な視聴の指導を行ったグループでは、かえって視聴時間が増大したのに対し、他2つのグループでは、それぞれ視聴時間が減少していた。このことから、テレビ視聴制限は単に親や教師からの外発的な制限だけで終わってはあまり意味がないことが示された。直接的な制限が強まれば、その反動でかえってテレビ視聴がふえかねないと考えることができる。

このような親の視聴制限が子どもに及ぼす影響に関しては研究が不足している。子ども時代に親から視聴制限を受けた人と受けていない人とで、ある程度自分で判断できるようになる高校生や大学生になった時に、テレビ番組に関してどのような意識を持つのかについては、まだ明らかにされていない。

子どもが視聴する番組を考えると、菅原ら（2008）の研究では、3歳頃までは子ども番組を中心に視聴している。しかし、徐々にアニメ番組の視聴が増加し、その後にバラエティなどの番組を視聴するようになることが示されている。つまり子どもがテレビを見ることに没頭する（専念視聴）ようになるにつれて、アニメ番組の影響が大きくなるといえる。

また、諸富（2001）の研究でも親が子どもに見せたくない番組として「クレヨンしんちゃん」や「犬夜叉」が挙げられてあり、子どもへの影響を考える場合、アニメ番組を中心に考えることが必要である。しかし、従来の視聴制限の研究は、バラエティ番組などすべての番組を含めたものであり、アニメ番組を中心としたものはほとんど見られなかった。「はだしのゲン」「火垂るの墓」などテレビアニメ番組は平和授業の教材として取り上げられ、また、「しまじろう」やNHKのテレビアニメのように、情操教育に役立てられているものもある。しかし一方では、「クレヨンしんちゃん」を代表とした作品で下品な振る舞いや言動、「ONEPIECE」「NARUTO」などの暴力的なシ

ーンが多用されていることなど、子どもへ悪影響を与えかねない要素も含んでいる。

そこで、本研究では全てのジャンルの番組ではなく、テレビアニメだけの視聴制限に焦点を当てることが重要であると考える。

まず、テレビアニメに限定して、親が子どもにどの程度視聴制限を与えているのかを検討する必要がある。そのために、高校生と大学生を対象に、子どもの頃に親からテレビアニメの視聴制限を受けていたかどうかの実態を調査する。視聴制限については、視聴時間帯と視聴時間の長さと番組について制限があったかどうか、またその厳しさについても調べることにする。

また、親から視聴制限を受けることが、高校生や大学生のアニメに対する好意度や、アニメが子どもに及ぼす影響への意識にどう影響するのかについて検討する。従来の研究は、制限と視聴時間との関係を調べていたが、制限と好意度の関連は調べられていなかった。アニメ視聴を制限されればされるほどアニメが好きになり、執着してしまうといった関連はみられるのだろうか。なかなか手に入りにくいものほど手に入れたくなるような「希少性の原理」や、やっとのことで手に入れたものに対して非常に良いものと感じる「認知的不協和」といった現象がテレビアニメ視聴に関しても見られるのだろうか。テレビアニメに関しては、実際に視聴時間も重要であるが、アニメに対する好意度がその後のアニメ視聴行動に大きな影響を及ぼすと考えられる。好意度が高まると、成長して親からのアニメ視聴制限がなくなったときに、アニメに執着してアニメを視聴し、アニメからの影響を受けやすくなると考えられるからである。従って、本研究では、親からのアニメ視聴制限が高い人の方が制限のない人よりもアニメに対する好意度が高くなるといった関連性があるかどうかを検討する。

また、親からのアニメ視聴制限が高い人は、自分の子どもへもアニメ視聴制限をおこなうのだろうか。親からのアニメ視聴制限が高い人は、その考えを継承して自分の子どもに対してもアニメ視聴制限を行うのか、もしくは逆で自分が制限を受けていたので、反発して自分の子どもには制限を加えずに自由に視聴させるのだろうか。従来の研究では、このような親からのアニメ視聴制限と自分の子どもへのアニメ視聴制限との関連といった世代間伝達については検討されてこなかった。従って、本研究では、その関連について検討する。

さらに、子どもへのアニメの影響についての意識についても検討する。前述のようにアニメには、肯定的影響と否定的影響がある。親からのアニメ視聴制限が高い人は、アニメの否定的影響に意識が高いのではないのかと考えられる。また、アニメに対する好意度が高い人は、アニメの肯定的影響にも否定的影響にも意識が高いのではないかと考えられる。従って、本研究では、親からのアニメの視聴制限の高さとアニメに対する好意度が、アニメが子どもに与える影響についての意識と関連しているかどうかを検討する。

以上のことから、本研究の目的は、親から受けたアニメ視聴制限が、アニメに対する好意度、また自分の子どもへの制限意識と子どもへの影響の意識へどのように関連しているのかを検討することである。

2. 方 法

１）調査対象者：本研究の調査対象者は、短期大学１・2 年次生 190 名と高校生 69 名の計 259 名だった。この分析では短大生と高校生のみとする

その内 23 名に記入漏れがあったため分析から除き、実際の分析対象者は計 236 名だった。

２）手続き：アニメ視聴に関する質問紙調査を、2008 年 7 月から 9 月にかけて、短期大学生には講義中に集団で一斉に実施した。高校生にはオープンキャンパス時に任意で実施した。質問紙には次の 4 つの内容が含まれていた。

(1) 子ども時代の親からのアニメ視聴制限について

子ども時代（小学生まで）にアニメ視聴の時間帯・時間の長さ・番組について親から制限されていたかどうかを質問した。

・視聴時間帯の制限については、「朝」「夕方」「夜 7 時～夜 9 時」「夜 9 時以降」「どの時間もだめ」「時間帯で制限されていない」の 6 つから当てはまるもの全てに○をつけてもらった。

・視聴時間の長さの制限については、「まったくだめ」「1 時間以内」「2 時間以内」「3 時間以内」「親がダメと言ったら終わり」「時間の長さに制限はない」の 6 つから当てはまるものひとつだけに○をつけてもらった。

・番組の制限については、「あった」「なかった」のどちらかに○をつけてもらった。

これら 3 点に対して、制限の厳しさの程度を 5 段階（非常に厳しかった～全く厳しくなかった）で評定してもらった。

・時間帯と時間の長さについては、さらに視聴制限方法として「見ていたら親が小言を言う」「見ていたら親から注意される」「見ていたら親の機嫌が悪くなる」「見ていたらテレビのチャンネルを変えられる」「見ていたらテレビの電源を落とされる」「見ていたら罰がある」の 6 つから当てはまるもの全てに○をつけてもらった。

・アニメ視聴制限度は、複数回答可の質問項目については当てはまる項目の個数を点数化し、評定値はそのまま加算することで得点化された。その際に、それぞれで制限されていないと回答しているものに対しては加算しなかった。

(2) 現在のアニメ好意度について

・現在のアニメに対する好意度を 5 段階（とても好き～とても嫌い）で評定してもらった。

・また、好きで頻繁に見るテレビアニメがあるかどうかを、「ない」「1 番組」「2 番組以上」「5 番組以上」「10 番組以上」の 5 つから当てはまるものひとつに○をつけてもらった。「ない」を 1 点、「1 番組」を 2 点、「2 番組以上」を 3 点、「5 番組以上」を 4 点、「10 番組以上」を 5 点として点数化した。

・さらにそれらの番組を見た回数は「3～5 回」「5～10 回」「10 回以上」の 3 つから当てはまるものひとつに○をつけてもらった。「3～5 回」を 1 点、「5～10 回」を 2 点、「10 回以上」を

3 点として点数化した。

・また、現在のアニメに対する執着度を“アニメを見逃す”または“録画に失敗”したときにどの程度落ち込むのかを、6 段階（非常に落ち込む～好きなアニメがない）で評定してもらった。

・現在のアニメ好意度（5 点満点）＋頻繁に見るアニメ（6 点満点）＋その回数（3 点満点）＋現在のアニメ執着度（6 点満点）の合計を、現在のアニメ好意度得点とした。

(3) 自分の子どもに対する制限意識について

・自分が親になったとき、自分の子どもに対してアニメ番組への視聴制限が必要であるかどうかを 5 段階（とても必要～全く必要ない）で評定してもらった。

・また、子どもへのアニメ番組の視聴制限をどのように行うかを、「視聴時間帯で制限する」「視聴時間の長さで制限する」「番組で制限する」「アニメの内容について説明をする」といった具体例を挙げ、その中から当てはまるものひとつに○をつけてもらった。

・また、説明については、子どもに対してどのように説明をするかを、自由記述欄を設けて記入してもらった。

(4) アニメ番組の子どもへの影響

・アニメ番組の場面や内容が子どもに何らかの影響を与えると思うか、個人のアニメ番組の影響に関する意識を調査した。

・肯定的な影響に関する「命の尊さが伝わる場面」「自然や地球環境の大切さが伝わる場面」などの 7 項目、否定的な影響に関する「お金や食べ物などのものを粗末にする場面」「精神的な差別や人を侮辱する発言」などの 11 項目、計 18 項目について、どの程度子どもに影響を与えるかどうかを 5 段階（とても思う～全くないと思う）で評定してもらった。

・評定値が高いほどアニメ番組に対する意識が高いものとした。

・なお、項目は、2004 年 3 月に社会法人日本 PTA 全国協議会で行われた「モニタリングによるテレビ番組の実態調査」のアンケートの中のアニメ番組の場面や内容についての質問項目から抜粋した。

3. 結 果

(1) 親からのアニメ視聴制限の実態

子どもの頃、親からアニメ視聴制限をどの程度受けていたかについて検討した。視聴時間帯、視聴時間の長さ、番組の 3 つの項目を前述のとおり得点化し、その合計が 10 点以上の者を制限高群、1 点から 9 点までの者を制限低群、0 点の者を制限無し群とした。

その結果、制限高群が 45 名、制限低群が 79 名、制限無し群が 112 名になった。このことから、制限を受けていた者 124 名と制限を受けていなかった者 112 名の数は、ほぼ同数であることが示された。

また、制限を受けていた者のうち、その制限の内容は、視聴時間の長さ（101名:82.2%）、視聴時間帯(71名:57.2%)、番組（36 名：29.0%）の順に多かった。さらに、視聴制限を受けた人の視聴制限の厳しさに関する5段階評定を分析した結果、視聴時間帯の視聴制限の厳しさは平均3.13、視聴時間の長さの視聴制限の厳しさは平均2.95、番組の視聴制限の厳しさは平均2.85であった。

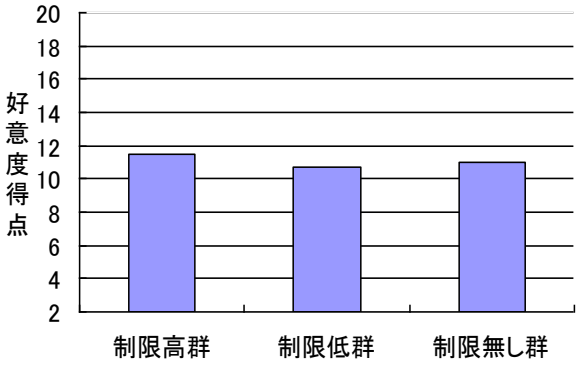

図1　親からのアニメ視聴制限度とアニメ好意度の関連

以上のことから、親からのアニメ視聴制限は、視聴時間の長さを制限することが多いが、時間帯に関して最も厳しく制限することが明らかになった。また、特定の番組を制限することは、少ないことが示された。

(2) 親からのアニメ視聴制限度と好意度の関連

親からのアニメ制限の強さによって、アニメに対する好意度に違いが見られるのかどうかを検討した。親からのアニメ視聴制限の得点により、10 点以上を制限高群、1～9点を制限低群、0 点を制限無し群として、各群のアニメ好意度得点を比較した。アニメ好意度の得点化は方法に記載されているとおりに行った。各群のアニメ好意度の平均点を図1に示した。図1のデータに基づき、1要因の分散分析を行った結果、有意差は見られなかった。

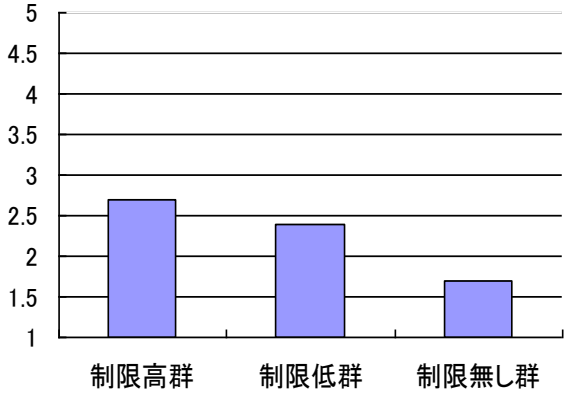

図2　親からのアニメ視聴制限度と子どもへの制限度の関連

このことから、アニメ視聴制限の強さと、アニメ好意度には関係がないことが明らかになった。有意差は見られなかったが、図 1 より制限高群の好意度が最も高く、制限無し群が次いで高く、制限低群が最も低かった。親から強く視聴制限を受けているとかえってアニメ好意度が高くなるのではないかと予想されたが、制限が強いほどアニメを好きになるわけではなかった。しかし、逆に制限が強いからと言って、アニメを全く嫌いになるというわけでもなかった。

(3) 親からのアニメ視聴制限度と自分の子どもへの制限意識の関連

親からのアニメ視聴制限の強さによって、自分の子どもに対する制限度に違いが見られるかどうかを検討した。親からのアニメ視聴制限の得点により、10 点以上を制限高群、1～9 点を制限低群、0 点を制限無し群として、各群の子どもへの制限評定値を比較した。各群の平均点を図 2 に示した。図 2 のデータに基づき、1 要因の分散分析を行った結果、有意差が見られた（$F(2,235)=20.49, p<.01$）。Tukey 法による下位検定の結果、制限高群と制限無し群の間と、制限低群と制限無し群の間に、それぞれ有意差が見られた。このことから、親から視聴制限を強く受けていた人の方が、自分が親になった場合に自分の子どもにも視聴制限を強くすると考えていることが明らかになった。また、同様に親から視聴制限を受けていなかった人は、自分の子どもへも視聴制限はあまりしないと考えていることも示された。

実際に子どもにテレビアニメ視聴制限をどのようにするかについての回答の割合を分析した。制限高群と低群を合わせて視聴制限有り群とし、制限無し群と比較した。制限有り群の中で自分の子どもにも視聴制限もしくは何らかの働きかけをすると答えた 104 名と、制限無し群の中で自分の子どもに視聴制限をするもしくは何らかの働きかけをすると答えた 74 名を分析対象とした。制限の仕方の「視聴時間帯」「視聴時間の長さ」「視聴番組」「アニメについての説明」からあてはまるものを選んだ人数の割合を、親から制限有り群と制限無し群で比較した。その結果を図 3 に示した。

図 3 より、視聴制限有り群は、自分の子どもに視聴時間の長さや視聴時間帯を制限しようとする人が多いが、視聴制限無し群は、自分の子どもには番組を制限するか番組やアニメについての説明を行う人が多いことが明らかになった。つまり、親からアニメ視聴制限を受けていた人は、親から制限されたのと同じ方法で、子どもにも制限する考えを持っていることが示された。親から制限を受けていなかった人は、たとえ自分の子どもに制限をするとしても制限の方法は番組内容の制限であり、制限というよりはアニメに対する説明をするという方法を取ることが示された。また、制限無し群の子どもに対するアニメの説明の仕方の自由記述では「悪いことと、良いことの区別をつけながら見なさい」「アニメはアニメで現実に起こりえないことだから真似しちゃ駄目

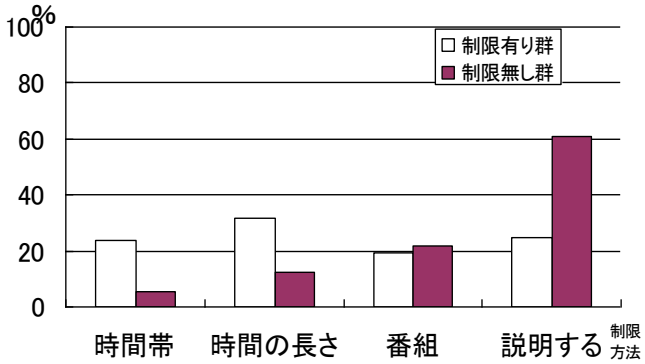

図3 親からのアニメ視聴制限度と子どもへの制限方法の関連

だよ」といった、決して視聴自体を制限するような意見は見られなかった。以上のことから、親からのアニメ視聴制限は、量的にも質的にも世代間伝達されるということが明らかになった。

(4) 親からのアニメ視聴制限度と好意度によるアニメ意識の違い

親からのアニメ視聴制限の強さによって、アニメが子どもに与える影響に関する意識に違いが見られるかどうかを検討した。(2) の結果から、親からのアニメ視聴制限が強い人の中にも、アニメが好きな人も嫌いな人もいることが示された。従ってアニメ視聴制限度と好意度によって、調査対象者を分類し、アニメに対する意識の違いを検討した。アニメ視聴制限は制限が一つでもあれば有り群、制限が無い場合を無し群とした。好意度は、平均点以上を好意度高群、平均点未満を好意度低群とした。アニメ意識は肯定的影響 7 項目、否定的影響 11 項目のそれぞれについて合計点を比較した。各群の平均点を図 4、5 に示した。

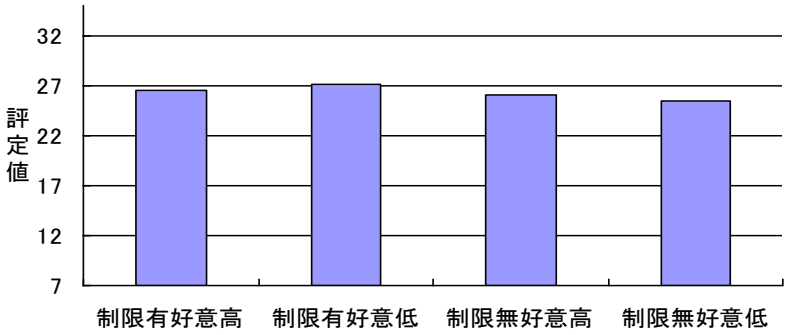

図4 アニメ視聴制限度と好意度による
アニメ影響意識の違い（肯定的影響）

このデータについて 2 制限度（制限有・制限無）×2 好意度（高・低）の 2 要因の分散分析を行った。その結果、肯定的影響については、有意差は見られなかった。否定的影響については、制限度の主効果が有意だった（F（1, 232）=4. 27, p<. 05）。つまり、親から視聴制限を受けていなかった人よりも制限を受けていた人の方が、アニメが子どもに否定的影響を与えると思っていることが示された。アニメの好意度とは関連が見られず、親からの視聴制限がアニメの影響に関する意識に影響を及ぼす

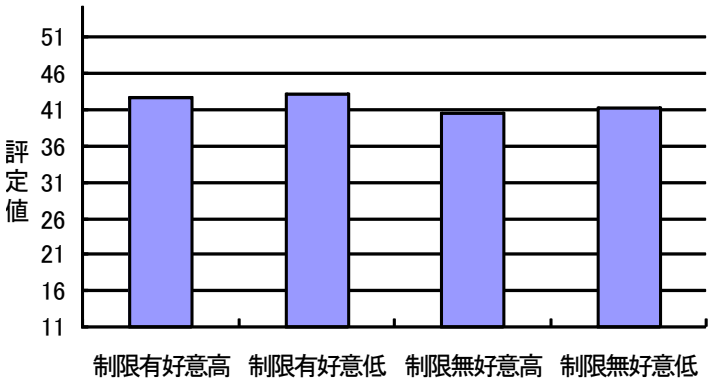

図5 アニメ視聴制限度と好意度による
アニメ影響意識の違い（否定的影響　）

ことが明らかになった。

4. 考 察

本研究の目的は、親から受けたアニメ視聴制限が、アニメに対する好意度、また自分の子どもへの制限意識と子どもへの影響に関する意識にどのように関連しているのかを検討することであった。

1）視聴制限について

まず、子どもの頃の親から受けていたアニメ視聴制限について検討した。その結果、制限を受けていた者と制限を受けていなかった者は、ほぼ同数であることが示された。また、親からのアニメ視聴制限では、視聴時間の長さを制限することが多いが、時間帯に関して最も厳しく制限し、特定の番組を制限することは少ないことが示された。これは、従来の研究とほぼ共通した結果であり、アニメ番組のみに特別な制限をしているということではなかった。したがって、親からの視聴制限は、テレビ全般に対して同じように行われていることが示唆される。

視長時間の長さや時間帯に関する制限が多いという結果は、親がアニメの内容を詳細には吟味せずに視聴制限していることを示していると考えられる。しかし、視聴制限をした時間帯だけで、いわゆる子どもに悪影響を与える内容のアニメが放送されているとは限らない。また、内容を吟味せずに、時間帯や長さなどを単に外発的・形式的に制限しても、視聴制限の効果があまりないことも考えられる。アニメ番組が多様化され、時間的にも 24 時間アニメが放映されているようなテレビ環境においては、親自身がアニメ番組の内容を吟味した上で制限の仕方を考えていくことが今後必要になってくるだろう。

2）視聴制限とアニメ高緯度の関連について

次に、親からの視聴制限とアニメ好意度の関連について検討した結果、視聴制限とアニメの好意度との関連はみられなかった。親から視聴制限を受けた人たちは、その制限に反発し、逆にアニメを好きになる度合いが高いのという場合もあるのではないかと仮定したが、そのような関連はないことが示された。逆に言えば、親が制限をしていたとしてもその影響で子どもがアニメを全員嫌いになるというわけでもないということである。親からの視聴制限が強かった人の中に、アニメ好意度が高い人がいたことも事実である。親が視聴制限をしても、子ども自身がアニメに関心を示して、非常にアニメを好きになったり、アニメに執着したりすることもありえると考えられる。

3）視聴制限と子供自身の制限意識の関連

その一方で、親からのアニメ視聴制限度と自分の子どもへの制限意識の関連を検討した結果、視聴制限を受けた人は自分の子どもにも視聴制限をするということが明らかになった。親からの視聴制限が強いほど自分の子どもにも強く視聴制限をしようと考えていることが示された。また、視聴制限方法に関しても、視聴制限を受けていた人は、自分が制限を受けていたのと同じように、

自分の子どもにも視聴の時間帯と視聴時間の長さを制限する人が多いことが示された。また、視聴制限を受けていなかった人の中にも自分の子どもにも視聴制限を行うと答えた人はいたものの、ほとんどが番組の説明を行うという形で接すること、また、制限を行うにしても視聴番組の制限を行うということが示された。これらのことから、親から制限を受けていた人は、自分の子どもにも同じように制限しようとし、制限を受けていなかった人は、自分の子どもにもあまり制限しないようにしるという考えを持っており、親から受けたアニメ視聴制限は世代間伝達される可能性が示唆された。

４）視聴制限と将来の子どもへの影響意識について

最後に、アニメ視聴制限と好意度によるアニメの子どもへの影響意識の違いについて検討した。その結果、肯定的影響については、視聴制限度や好意度による違いは見られなかった。しかし、否定的影響については、視聴制限度による違いが見られ、制限が無い人よりも制限がある人の方が、アニメが子どもに否定的影響を与えると思っていることが示された。

5. まとめ

以上のことをまとめると、親のテレビ視聴制限は、子どものアニメの好みには影響を与えないが、その子どもが自分の子どもに対して与えようと考える視聴制限の意識や子どもに与える否定的影響についての意識と関連していることが明らかになった。親から視聴制限を受けていた人は、アニメの否定的影響について意識が高まり、自分の子どもにも視聴制限が必要であると考えるようである。その視聴制限方法も親から受けていた方法を継承し、時間帯や視聴時間の長さで制限を行おうと考えていた。確かに、テレビアニメには暴力表現や過激な表現などが含まれているものもあり、否定的影響があることを看過することはできない。したがって、親の視聴制限が子どもに世代間伝達されることは意味があるだろう。

しかし、視聴制限を受けていない人の中には、視聴制限に対する意識が薄く、その必要性を感じていない人もいる一方で、制限というよりは、アニメの内容を自分の子どもに説明するという方法を取る人が多いということは興味深い結果である。親は視聴制限をせずに自由に子どもにアニメに触れさせているが、多くのアニメに自由に触れることで、子どもなりにアニメの問題点なども意識している可能性もある。その結果、視聴時間や時間帯などの形式的な制限ではなく、アニメの内容に関心を向け、よいものと好ましくないものの選別を行うことの重要性を自分の子どもに伝えようという意識が生じていると考えられる。

現在の家庭環境では、パソコンでインターネットの動画サイト（「YouTube」や「にこにこ動画」など）からアニメの視聴が可能であり、またテレビアニメだけ放送している専門チャンネルもある。このように 24 時間テレビアニメを視聴できるようになっている。「ひぐらしの鳴く頃に」などの過激な内容も、深夜帯ではあるが、特に制限もなくテレビで放映されている。このことから見ても、視聴時間や時間帯のみの制限には限界があると考えられ、今後より一層アニメ視聴に関

して考えていかなければならない。一方、映画アニメーションの代表ともいえるスタジオジブリ作品や、海外のディズニー作品をはじめ、アニメにも素晴らしい作品が多くある。2 次元の世界だからこそ実現できる世界観、ファンタジーにあふれ、その世界だからこそのリアリティは、実写ではとても真似できるものではない。また、テレビアニメの技術は格段に進歩してきており、その中でもCG技術は少年の夢であるロボットアニメに、より一層のリアリティと迫力を与えている。このようにあらゆる技術を駆使した表現であるテレビアニメを、子ども時代に見せることで、夢を与えることもできるだろう。

したがって、テレビアニメの視聴制限は、制限を行う側が、テレビアニメに対する知識を持ち、判断しなければならない。やはり、形式的な制限だけでなく、子どもの自立心を養うためにも子どもの選択に任せて、判断させ、親はサポート役であることも必要だろう。親の制限方法が、次の世代にも伝達されることも考慮しながら子どもと接することが重要だと考えられる。

引用文献･参考文献

団塚理恵・高橋匡子　メディアリテラシー育成に関する調査研究－規範意識と視聴環境の影響から－　大分県立芸術文化短期大学コミュニケーション学科三宅正太郎研究室卒業研究論文集 2002　, 107－112.

藤岡英雄　親の視聴統制―その性格と効果―　文研月報 3 月号 1971

深谷昌志　孤立化する子どもたち　日本放送出版協会 1983

深谷和子　生活の中でのテレビ視聴への提言　教育と医学 1986

村田光二 1991 子どもとメディア.　無藤隆（編）「新・児童心理学講座第１１巻 －子どもの遊びと生活」金子書房 Pp. 213-265

村田光二　子どもの発達とテレビ　無藤隆・村田光二・浜野保樹　『テレビと子どもの発達』　東京大学出版会, 1987　12－44.

諸富明利咲　メディアの暴力映像が子どもに与える影響について　大分県立芸術文化短期大学コミュニケーション学科三宅正太郎研究室卒業研究論文集, 2001　97－110.

ＮＨＫ世論調査部編　いま、小学生の世界は―続・日本の子どもたち―　日本放送出版協会 1985

総理府青少年対策本部編　情報化社会と青少年　大蔵省印刷局

菅原ますみ・向田久美子・酒井厚・坂元章・一色伸夫　“子どもに良い放送”プロジェクト　フォローアップ調査中間報告　第 5 回調査報告書　ＮＨＫ放送文化研究所 2008

【謝 辞】

本研究を行うに当たって、共同研究者の藤田文（大分県立芸術文化短期大学情報コミュニケーション学科）のゼミで平成 20 年度卒業生梶谷友香さん、紙谷和希さん、新枦彩さんにご協力いただきました。ここに記して、深くお礼申し上げます。

The generation transmission of parents' limitation of watching the TV animation

Masataro MMIYAKE　　Aya FUJITA

The purpose of this study was to investigate the generation transmission of parents' limitation of watching the TV animation programs. The participants were 69 high school students and 190 college students. They were asked the limitation of parents' limitation of TV animation when they were children and their own opinion about the limitation of TV animation to their children. The main results showed that the students who were received the strict limitation of watching TV by their parents have the opinion that need of limitation of TV animation for children. These findings suggested that the discipline from parents was succeeded to their children.

Key words: TV animation program, parents' limitation of watching TV, generation transmission